



Book Review

評者:西村ユミ

東京都立大学 健康福祉学部看護学科 教授

看護師が「書く」こと

著:宮子あずさ/本体:1800円+税

発行:医学書院/TEL:03-3817-5650



看護師が書くと世の中がよくなるとは？

私には、本を後ろから読む癖がある。だから、最後の節の「臨床を書けば世の中がよくなる……かも！」が最初に目に入った。なに！？「風が吹けば桶屋が儲かる」のようではないか。宮子さんは30余年間、看護師として働き、かつ著述を業としてきた。だからであろう、第1章の「書く」こと(=風が吹くこと)には、幾重にも意味が折り重なっている。

宮子さんにとっての著述は、「依頼を受けて仕事として書く」こと。そのスタートは小学生の頃である。だから、発表した文章は「読み手のもの」という“覚悟”がある。書いた文章に潜む悪意を点検し、自身の感情に“責任”を負う。“覚悟”“責任”の先に続くのは、“選択”。書かないという選択、それは文章に反映される。これらの言葉からおわかりのとおり、著者にとって書くことは「生きること」そのものである。この「生きる」には、もちろん、看護師として働くことがあり、そこで多様なエピソードに出会ってきた。夫の臨終の場で妻が即座に通夜の寿司の段取りをする、「すごいな〜」(感嘆)。失便によるシーツ交換後、背中御守りがなくなり、まるめたシーツを解いて探す。あるある。看護師として経験したこれらをどう「書く」かが、本書では示される。

他方で、多くの書き手の著作を読むなかで、著者は「知だけじゃだめだ、肉体なんだ」と思い、看護の道に誘われた。看護が著述を産むだけでなく、著述が

看護へと促したのだ。宮子さんのなかで、看護と著述が絡まっているのは、そのためなのか。

では、看護師はどのように書けばよいのか。第2、3、4章では、書く言葉として、禁句や「私」「ワタシ」「わたしたち」などの言葉の選び方だけでなく、宮子さんの疾病観や人間観と著述がいかに絡んでいるかが紹介される。書き出しから推敲、オチまでの段取り、小技、大技もある。具体的に書き方を紹介している箇所に、「トマトを通して根源的選択を書く」がある。私はこの節に、宮子さんの、文章を書くことの大事な点が凝縮されていると思う。ここでは、お店で「触ったトマトは買ってくれ」という宮子さんの訴えが、サルトルの「世界のなかにおける身構えの選択」と重ねられている。宮子さんの考えが、サルトルの言葉を経て明確になった。ここにも絡まりがある。

「神は細部に宿る」。著者は、日常の些末な出来事こそが以下のような確信を深めてくれるという。著述とは、些末な場面から多くをくみ取り、磨くことだ。それによって生まれるのは、「実は大した存在ではない人への温かい見方」「寛大さ」なのである。宮子さんの文章には、クスッと笑われることが多い。看護師が書くことの意味はここにある。臨床を書く→寛大さが表現される→世の中がよくなる。著者は書く看護を育てたいという。それは「継承」であり、世界をよくしたいという願望を含んだ試みののだ。